

辰五月 肝煎 八郎 平
右は天保三年也。此の芹も、廢藩後惣構堀を廢し、今は悉く絶えて知るものなし。

○長九郎左衛門蕃邸

長氏は、九郎左衛門連龍以來、能登國鹿嶋郡舊領田鶴濱に居館ありて、之を本宅とすれど、金澤にも居宅を構へたり。金澤城慶長の古圖に、三、丸石川門内に、長九郎左衛門・三輪志摩・横山山城三士の邸宅並びあるよし記載せり。有澤武貞の金澤細見圖譜にも、三、丸に長氏の屋敷有りといへり。信連記・可觀小説には、慶長五年大聖寺の軍終りて後、長九郎左衛門連龍へ御城西丸にて宅地を賜はり家作し、嫡子十左衛門好連へ利家卿の姫君を縁組仰付けられ、連龍は隠居して名を如庵と號し、能登の領地田鶴濱へ引籠り、折々金澤へ出勤すとあり。長家傳記には、慶長十六年九月好連歿し、同年弟連頼家督を繼ぎ、翌十七年長町の邸地を賜はるとあり。一説には、長町の邸地はもと如庵隱居屋敷にて、如庵へ賜はりしなりといへり。按ずるに、平野屋幸助所藏の古文書中に左の書簡あり。

其方手前にめづらしき茶入有之由、御みゝに相立候。今朝長如庵所へ御成之刻、そこしかけて御覽可被成旨御錠候條、いかにもおんみつにいたし、そとろぢまでもち可參候。はやゝいそぎ申候しし。

十月十九日

壽 庵

平のや 參

右は年曆詳かならずといへども、元和の初め頃ならんか。壽庵は小瀬甫庵の長男にて、元和元二年の土帳に、二百石坂井壽庵と見え、由緒帳に常々御近所被召仕。とあり。又野田桃雲寺の舊記に、元和元年閏六月十八日晚桃雲寺中燒失、其以後、芳春院殿御再建、方丈は神尾圖書廣間座敷御買入、大庫裏は長如庵老隱居屋敷之臺所御買入被爲建。とあり。按ずるに、如庵は元和五年二月卒せられたれば、其の頃、建物を毀ちたりしかど、九郎左衛門連頼尙此の邸地に家屋を建て置かれたりけん。三壺記に、寛永八年四月十四日犀川橋爪法船寺の門前より出火、河原町一面に延焼し、惣構の外藪の内長九郎左衛門・山崎長門の家に付き、大家の火なれば、千石町堂形一面に火と成る。とありて、此の時火災

に罹りたりしかど、連頼頓て再築して、金澤出府の寓所となし、本宅は能登田鶴濱にありしかど、寛文十一年三月連頼歿し、同年十一月九郎左衛門時連家を繼ぎける處、浦野孫右衛門一件に付き鹿嶋半郡の所領を召放され、更に金澤諸士並みの知行を賜はり、金澤居住と成る。依之田鶴濱の館を毀ち、其の材木共を金澤へ引寄せ、長町の邸地に造立す。其の建物後々まで存在して數代居住し、明治二年十一月藩侯へ呈上し退去して、裏地に更に居宅を建築し、爰に居住せり。其の巨細は下條に載す。

長氏の邸地は、延寶の金澤圖に見えたるものこゝに載せたる如し。従前その建物ありし頃は、正門前通りの長屋百間驛にて、長屋の狭間十三あり。玄關の梁上に、飛驒の良工の作なりと云傳へたる木工の籠を揚げたり。書院上壇の間は廣大にして、欄間の彫物甚だ凡ならず。俗に千疊敷と呼べり。又正門の並び南方に唐門あり。御成門と稱す。此の門は、貞享二年上州七日市藩前田利豐君の息女を、參議綱紀卿の猶子となし、長尙連へ下嫁せしめられし時造營すといへり。然るに明治二年長氏退去の頃、此の門を毀たれた

